

氏名	新家 崇義
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第 3535 号
学位授与の日付	平成20年3月25日
学位授与の要件	医歯学総合研究科病態制御科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目	Assessment of mean transit time in the engrafted lung with ¹³³ Xe lung ventilation scintigraphy improves diagnosis of bronchiolitis obliterans syndrome in living-donor lobar lung transplant recipients (キセノン肺換気シンチグラフィを用いた移植肺の平均通過時間の評価は生体部分肺移植後患者における閉塞性細気管支炎症候群の診断を改善する)
--------	--

論文審査委員	教授 谷本 光音 教授 田中 紀章 准教授 土井原博義
--------	-----------------------------

学位論文内容の要旨

閉塞性細気管支炎症候群は慢性拒絶反応の一型であり肺移植術後の主要な晩期合併症である。国際心肺移植学会の診断基準では病理学的診断または呼吸機能検査の1秒量の低下率により診断される。本研究では閉塞性細気管支炎の早期診断における閉塞性細気管支炎の早期CT所見とキセノン肺換気シンチグラフィの比較検討およびキセノン平均通過時間による定量的評価の有用性を検討した。生体部分肺移植においてキセノン洗い出し遅延像が早期CT所見より閉塞性細気管支炎症候群の診断に有用であることが示唆された。また片肺の平均通過時間は閉塞性細気管支炎症候群発症群で非発症群より有意に延長していることが実証され、発症群と非発症群の平均通過時間のカットオフ値を64.77秒に算定した。両肺機能検査である1秒量や侵襲的方法である組織学的診断と異なり、キセノン肺換気シンチグラフィでは非侵襲的に分肺機能測定が可能であり早期診断に有用な診断方法であることが示唆された。

論文審査結果の要旨

本研究では生体部分肺移植後に発症する閉塞性細気管支炎症候群(BOS)の早期診断法として、キセノン肺換気シンチグラフィの洗い出し時間の遅延が、従来からの診断法である1秒量の低下率やCTによる早期所見よりも診断的価値が高いことを、31例の自験例と142検査の結果から後方視的に導き出している。

肺移植時の慢性拒絶反応の早期診断に関して重要な臨床指標を見出した研究成果として価値ある業績と認めます。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。